

石川県七尾美術館だより

平成15年4月1日発行
編集・発行 石川県七尾美術館

第33号(春号)



「広重と北斎の
東海道五十三次と浮世絵名品展」より
とうかいどうごじゅうさんつぎ しょうの
東海道五拾三次 庄野 (保永堂版)

歌川広重 寛政9年~安政5年(1797~1858)
天保4年(1833)頃
錦絵大判

ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM



展覧会紹介

平成15年4月25日(金)～

6月29日(日)

休館日については裏表紙をご覧ください

「東海道五十三次と浮世絵名品展」

～歌麿・写楽から幕末バラエティーまで～

4月25日(金)～6月1日(日)

第一・第二・第三展示室

「浮世絵」は、江戸時代に「庶民の絵画」として誕生し、町人たちが求める娯楽や流行といった話題や、時々のニュースなどの情報を伝える媒体として、江戸を中心に大流行しました。

その内容は風景画や役者絵、美人画など実に幅広く、そこには人々の暮らしや楽しみなどが余す所なく写し出されています。

その単純な線と色面による大胆な構図や華麗な色彩、多岐にわたるテーマなどは、現代の我々から見ても非常に斬新で、当時の人々のみならず、時代を超えて観る者を魅了し続けています。



歌川広重「保永堂版 東海道五拾三次 日本橋」(初摺り)



歌川広重「保永堂版 東海道五拾三次 蒲原」(初摺り)



柳川重信「東海道五十三次 日本橋」

また、浮世絵はゴッホなど近代ヨーロッパの画家たちに大きな影響を与えた事はよく知られ、現在でも高い評価を得ています。

本展では風景画で活躍した歌川広重(一七九七～一八五八)、画狂人と称した葛飾北斎(一七六〇～一八四九)、美人画の名手・喜多川歌麿(一七五三?～一八〇六)、謎の役者絵師・東洲斎写楽(正没年不詳)ら代表的な浮世絵師達が描いた個性豊かな作品や、「妖怪絵」「寄せ絵」「横浜絵」といった幕末に流行した様々な浮世絵などを、広重と北斎の「東海道五十三次」を中心に、名作版画約二百点を紹介します。

1. 広重と北斎の東海道五十三次
広重の「東海道五拾三次」「五十三次名所図会」、北斎の「東海道五十三次」に大正時代に撮影された「五十三次」の古写真をあわせた計四種類の「東海道五十三次」を紹介します。

2. 旅模様・東海道中膝栗毛
十返舎一九の大ヒット小説「東海道中膝栗毛」をテーマに制作された滑稽で旅情あふれる浮世絵を紹介します。



三代豊国「東海道五十三次内 江尻(弥次郎兵衛)」

3. ゴッホと広重
世界的に有名な巨匠・ゴッホが浮世絵からいかに大きな感銘を受けたかを、広重の風景画を例に紹介します。



フィンセント・ファン・ゴッホ「雨中の橋」

本作品は写真展示です。



歌川広重「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」

4. 黄金期の浮世絵アラカルト
江戸時代後期の「浮世絵の黄金期」を築いた北斎や歌麿、写楽などの美人画、役者絵、風景画などを紹介します。



東洲斎写楽
「四代目岩井半四郎の乳母 重の井」

5. 幕末バラエティー
幕末の混沌とした時代を背景に登場した「異国趣味の風景画」「妖怪絵」「寄せ絵」「横浜絵」など多種多様な浮世絵を紹介します。



歌川国芳
「みかけ八こ八あがとんだいい人だ」

観覧料

	一般	個人	団体
大高生	700円	350円	600円
	350円	300円	300円

中学生以下無料・団体は二十名以上です。

「第59回現代美術展 七尾展」

6月6日(金)～29日(日)

第一・第二・第三展示室

「現代美術展」は、石川県下で最大規模を誇る公募展です。その歴史も古く、戦後間もない昭和二十年十月に「美術文化の向上による新日本建設への寄与」をスローガンに、記念すべき第一回展が開催されました。以後、毎年継続され今回で五十九回目となり、石川県立美術館を皮切りに、加賀展・松任展と巡回し、七尾展でその幕を閉じます。

当展は県内在住の重要無形文化財保持者(人間国宝)を筆頭とした現代の美術界を牽引する作家作品をはじめ、これから更なる制作活動をしていこうという新進気鋭の作家までの幅広い層から、千点にも及ぶ作品が出品・応募されています。そして、入選率五〇パーセントという厳しい審査を経て選ばれた入選作品が展示されます。

七尾展は、昭和二十一年六月の第二回展が七尾御被国民学校講堂を会場に開催されたのが始まりです。その後、平成七年四月の当美術館開館以後は能登地方関連作家作品を中心に、「現代美術展」の地方展という形で毎年開催されています。

これだけの作品を一堂に鑑賞できる機会は貴重であり、石川県における現代美術の流れを展覧する絶好の機会といえるでしょう。

七尾展では「現代美術展」入選作品の中から、能登地区(押水町以北)在住者の作品、最高賞・次賞・委嘱賞受賞作品、能登地区在住および出身委嘱作家作品、財団法人石川県美術文化協会委員の作品を選抜、日本画・洋画・彫刻・工芸・書・写真の六部門で約二百点を展示予定です。



「第58回現代美術展 七尾展」 展示室風景

観覧料

	一般	個人	団体
大高生	500円	350円	400円
	350円	300円	300円

中学生以下無料・団体は二十名以上です。

主催(予定)

財団法人七尾美術館
財団法人石川県美術文化協会
北國新聞社・テレビ金沢
ラジオななお

後援(予定)

能登地区各市町村教育委員会

アートホール催し物案内

達しのぶ音楽教室ピアノコンサート

6月15日(日)

開演 午後1時30分

ピアノの独奏と連弾によるコンサートです。小学生から高校生まで、各自選んだ曲を演奏します。

入場料 無料

主催 達しのぶ音楽教室門下生

後援 ㈱河合楽器製作所・ミヤコ音楽堂・能登ピアノレスナー会・ヒラタピアノ

チューニング

連絡先

達しのぶ
☎〇七六七(六二)三四九七

寺井梓&坂田朋優〜若手ピアニストの共演〜

6月20日(金)

開演 午後7時

七尾市出身、桐朋学園大学卒の寺井梓&北海道出身、東京芸術大学大学院卒の坂田朋優。各地でのコンサート経験のある若手ピアニスト二人が今回七尾美術館でのリサイタルを実現。是非この機会にフレッシュな演奏をお楽しみ下さい。

入場料 一般 千五百円 高校生以下 千円

親子 二千円

主催 ヤングピアニストを育てる会

後援 七尾市教育委員会・七尾市文化協会・能登ピアノレスナー会・北國新聞社・ラジオななお

寺井 洋子

連絡先

☎〇七六七(五二)三〇三九

第四回メロディーパレット

6月29日(日)

開演 午後1時30分

石田ゆかりピアノ教室、藤本秀美由社中(三味線)の合同発表会です。ピアノソロ、三味線合奏、ファミリーアンサンブル、又「ピアノと三味線」洋と和のハーモニーをお聴き下さい。

入場料 無料

主催 石田ゆかりピアノ教室・藤本秀美由社中

後援 ミヤコ音楽堂・北國新聞社・ラジオ

ななお・能登ピアノレスナー会

連絡先

石田ゆかり
☎〇七六七(五三)四六二八

当館主催の催しアートホール

映画上映会【入場無料】

毎月第2・4土曜日 午後2時〜

・4月12日

「彫漆〜音丸耕堂のわざ〜」(約30分)

人間国宝と呼ばれている重要無形文化財「彫漆」の保持者、音丸耕堂の作品制作の過程を克明に描く。

・4月26日・5月10日・24日

「浮世絵と歌川広重」(22分) 他

浮世絵、特に歌川(安藤)広重の版画資料を手がかりに、江戸中期の町人の暮らしや新しい文化の特徴を描く。

・6月14日・28日

「日本の美術工芸」(28分)

日本の誇る美術工芸を浜田庄司、森本華弘、田辺竹曇、青、前田青郎、富本憲吉、松田権六、棟方志功という七人の大家の作品をとおして紹介する。

問合せ先 石川県七尾美術館

☎〇七六七(五三)一五〇〇

第四回 石川県七尾美術館

「友の会鑑賞の旅」のご案内

参加者大募集!

降る雨にもなんとなく暖かさが感じられ、いよいよ春到来!そして、「友の会鑑賞の旅」参加募集のおしらせです。

今回は、「高岡市美術館」と志功ゆかりの地にある「福光美術館」の2館で同時開催される特別展「棟方志功展」の鑑賞をメインに富山方面を巡ります。

日本を代表する版画家の棟方志功は今年九月五日に生誕百年を迎えます。志功が生み出すダイナミックな作品からは、創作に対するひたむきな姿勢、美を探究し続ける心が伝わってきます。

同展覧会は「棟方志功展」としては過去最大規模で行われるもので、北陸地方では富山県でのみ開催。これはもつ必見、といえます。皆様からのお申込みをお待ちしております!

日程 6月22日(日)

見学予定地 高岡市美術館、福光美術館

ほか富山方面

参加費 五、〇〇〇円

募集定員 先着45名

(対象は原則として成人)

お申込み方法

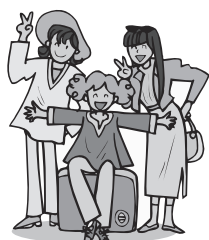
参加ご希望の方

は、5月1日(木)

以降に参加費を添

えて、当館受付ま

でお越し下さい。



平成十四年 新収蔵品紹介

平成十四年度中に、新しく当美術館所蔵品になつた作品を紹介します。

・絵画「陳希夷睡図」 長谷川信春（等伯）

桃山時代前期頃（十六世紀）制作

七尾市にて購入

・洋画「海の詩 旅」 野中未知子

平成十四年（二〇〇二）制作

第58回現代美術展

最高賞・石川県知事賞受賞

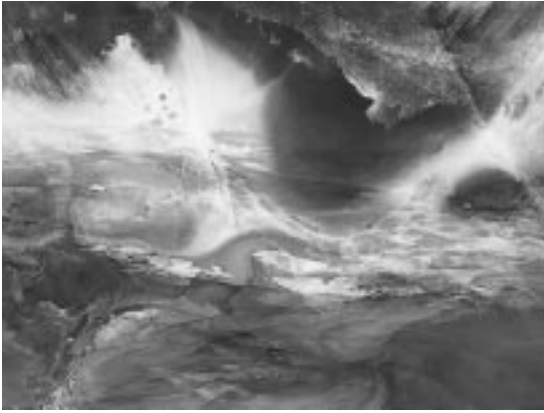
野中未知子氏より寄贈

・書「小倉百人一首」 遠藤邑石

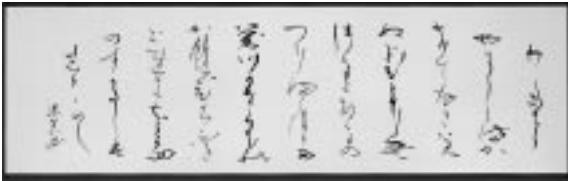
平成十四年（二〇〇二）制作

第58回現代美術展委嘱賞受賞

遠藤邑石氏より寄贈



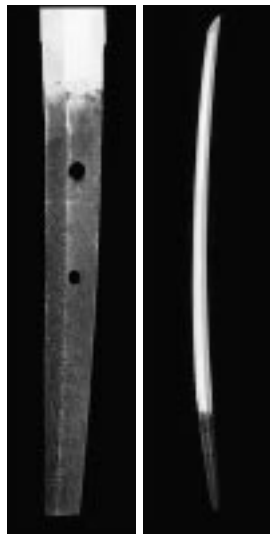
「海の詩 - 旅 - 」野中未知子



「小倉百人一首」遠藤邑石



「脇指 銘近江大掾藤原忠廣」



「刀 銘肥前住播磨大掾藤原忠國」



「陳希夷睡図」
長谷川信春（等伯）

新収蔵品につきましては、今後「所蔵品展」などで順次展示していきたいと思っております。なお、具体的な展示期間などに関しましては、美術館までお問い合わせください。

・刀剣「刀 銘肥前住播磨大掾藤原忠國」

播磨大掾忠國

江戸時代前期（十七世紀）制作

・刀剣「脇指 銘近江大掾藤原忠廣」

近江大掾忠廣

江戸時代前期（十七世紀）制作

奥村 回氏より寄贈

等伯コーナー 講演会報告

「妙蓮寺の障壁画について」

講師 狩野 博幸

この妙蓮寺には、数多くの長谷川派と思われる襷絵がございます。現在残っておりますのは全部で三十八面（表裏）で、重要文化財に指定されております。それに附して柳の絵四面が加えられ、全部で四十二面（さらに天袋四面を合わせて）です。その一部分が、今回この美術館に來ています。

【この後に続く報告は、当館「美術館だより」前号（三号）に掲載しました。今回は前回の続きを掲載します。スライドを使用した作品の写真、図面等は、紙面のスペース上省かせていただきました。図解部分につきましては、前号をご参照ください。

尚、全文掲載については、別の機会に実現できればと考えております。】

スライドをお願いします。今出品している四面です。この岩、この鍔法が狩野派の作品では絶対に出てこないし、土佐派とか大和絵系の絵描きでもない。

また、これを見た時に、我々はどついつぶつに題名をつけるでしょうか。勿論桜がありますけれども、普通は松図と見ているのではないのでしょうか。大体において松が前面に出て来て、その背後に桜があるというふうになっていますから、これを一つの部屋の名前で呼ぶ時に、「松之間」と呼んだ方が自然だと言えます。妙蓮寺の障壁画で、「こ」を覚えておいてください。

やはり絵というのは、それぞれに時代の癖というものがあるんです。この金雲の形というのも微妙に変わってきます。こついつ非常に大らかな神経質でない金雲の形というのは、やはりある時期に共通するわけです。結論を先に言ってしまうと、「この妙蓮寺の障壁画を慶長の終りとか、元和の初めや寛永に持っていたりしますが、私はもう少し早いといつぶつに考えています。」

次スライドをお願いします。これは、智積院の障壁画です。最近これは、等伯と久蔵の合作というふうに言われています。文禄二年（一五九三年）、この智積院の障壁画が完成した年と言われているわけで、ここで見ていただきたいのは、松の葉叢の描き方です。これは松の下枝というふうに言ったりもしますが、こちら側のこの葉叢の描き方と下枝の描き方の共通点で、長谷川派というのがわかりかと思えます。

次スライドをお願いします。これは狩野永徳の息子・孝信の絵で、御所の紫宸殿のために描いた絵の一部分です。これが出来たのは、慶長十九年（一六一四）くらいです。この松、非常に狩野派らしい素敵な松ですけれどもどこか予定調和的な、のんびりとしたところがないですね。ある人々は、妙蓮寺の障壁画をこれと同じ時代、或いはそれよりも後の時代においたりしますが、私にはどうしてもわかりません。例えば、もうその時には兄の光信も父・永徳もおりませんし、お祖父さんの松栄もおりません。つまり、狩野派の棟梁の役目を果たした狩野孝信が、慶長十九年（一六一四）に描いたのがこれなんです。

スライドをお願いします。これは北野天神社が所蔵している、等伯の二男・宗宅の屏風です。宗宅は、慶長十五年（一六一〇）に等伯が死んだ、その一年後に死ぬわけです。その彼の晩年作となると慶長年間の作品だと思われるんですが、この金雲のこの間の抜けた時代を計算に入れても何かベタツとした、先程の智積院や妙蓮寺の障壁画が持っていた、あのゆったりとした堂々たる金雲の形というのが一切ないわけです。一番最後に持っていたとしても、慶長十六年です。その時点で、もうすでににこういふふうな一種の弛緩した、ゆるい絵に長谷川派はなっているわけで、これを見ますと妙蓮寺の障壁画というのは、意外に古いかないことが段々おわかりになるのではないかと思います。

次スライドをお願いします。慶長七、八年というふうな考えられています京都・妙法院の狩野光信画にも、妙蓮寺障壁画のようなああゆったりとした感覚という

のではないんです。また、狩野孝信と考えられる岡山池田藩が持っていた屏風も、恐らく慶長の半ばから後半にかけての作品だと思われませんが、あのゆったりとした表現と比べると、ある種うるさい感じがするのではないのでしょうか。

次スライドをお願いします。これは、京都国立博物館の阿国歌舞伎の絵です。等伯が関与したかどうかは別として、少なくとも長谷川派である事は間違いないです。慶長七年（一六〇二）に阿国の歌舞伎が初めて北野の境内で行われますから、それ以後の風景であることは確かです。この人物表現、すらりと立つこつこつ姿が長谷川派の風俗画の特徴です。これらの風俗画は、今まで町絵師の作品だというふうに言われてきました。長谷川派の作品として認められるようになってきています。その一つの基準になるのが、この屏風なんです。

次スライドをお願いします。これは、奈良が描かれているんです。これも長谷川派だということが、人物表現或いは桜の表現とか松の表現などで、わかってくるわけです。この松は、少し形式的になりかけていますが、狩野派とは違う長谷川派の松の特徴が出ています。阿国歌舞伎を長谷川派ということに決めますと、次第に他の絵も長谷川派とみることができるようになってくるんです。例えば岩佐又兵衛とかの絵だと、人物がもつとグーツと動くわけですけど、何かこの長谷川派の風俗人物画というのは、こつこつと立つんですね。こういうものを基準にすると、南蛮屏風の中にも長谷川派というのを当てはめていく事ができるようになるわけです。いわゆる風俗画の流行を追っている絵描きたちのような、人間と人間が絡み合うような、そういう姿とは違つんです。

今、妙蓮寺の障壁画から、長谷川派と思われる風俗画の話をしました。もう一つはその松の表現ということになります。そこで、私が妙蓮寺の障壁画について、実は非常に早い作品だと思ふ一つの例証を挙げたいと思います。

天端寺客殿障壁画について、これは秀吉のお抱え絵師である狩野永徳筆で、天正十六年（一五八八）に描かれたものです。実は、この天端寺というのは、大徳寺にあつたんです。天正十六年に秀吉がお母さんのために建てたんです。寿塔といって、生きている間に建てたお寺です。その客殿のほとんどが金地着色で、しかも、竹、松、桜、そして菊というふうな、一つの主題で一つの部屋を描いているということが、江戸のいくつかの記録でわかります。安土のお城はもうありませんから、これが残っていれば一番盛んだった永徳の基準作になりえたんです。そこで、様々な事が言われまして、特に智積院の長谷川一派による作品は、それより後に描かれていますから、この天端寺の狩野永徳の絵を参考にしたら違いないと言われていたわけです。ところが、その絵が残っていませんから、空想にしか過ぎなかつたわけです。ところが近年、江戸時代にその天端寺に行つて、それを縮写したものが見つかりました。一つは、近世の京都の絵描き、原在中の息子・在正の印が押してあるものです。それがその仏壇の間の前の室中、客殿の間にあたる、松之間ですね。まさに松一色として記録に残っていたものの一部分が描かれて出てきたんです。松が描かれ、月が描かれていますが、つまり、紙本金地着色で松に月が描かれ、金雲の形も描かれている。この四面分だけが、これで出てきたんです。これは、武田恒夫先生が発表されました。その後、実は私が別の所で、もう一つの資料を見つけたんです。幕末から明治にかけて活躍した狩野芳崖が安政四年（一八五七）三十歳の時、江戸での修行途中に一旦帰るわけです。その時の、色んな物を見たりのした物を描いているわけです。この上段を見ていただきますと、「三月廿一日、京師於大徳寺」つまり京都の大徳寺においてと書いてあり、その左横に「天端寺」と書いてある。で、「永徳真跡」というふうな書いてあります。永徳真跡と書いて松があつて、ずーっと上の段は繋がって行くわけです。これは、仏壇の間の下の真中の部屋。ですから、四面そしてこの大きいところ

が四面あって、真中がこれは七面か八面になっているんですかね。つまり、松が最初のところ右側からいきますと二本、大きな幹が二本あります。それから、丁度正面のところ一本の松があって、そして、ずっと続いていって今度は西側ですね、西側に四面の松がある。ですから、先程の妙蓮寺の客殿も、正面室中の間の仏壇の間の境には、四面ではなくて八面ないし七面位のものがあったに違いないわけです。つまり、これが見つかつたことで、実は松だけが描かれている中に、太陽と月が描かれていたという事がわかります。太陽と月というのは、おそらく金、金板ですね。或いは銀板ですね。月が多分銀だつたと思いますけども、それが貼り付けてあったに違いないわけです。いずれにしても、太陽と月が描かれていたということは、日月、日月松図ということ、非常に珍しい描き方だつたということがわかるんです。ここで、重要なのは、この一番最初の三月廿一日という字が書かれている下に、

木が描かれていまして、ここに永徳真跡八重桜、永徳真跡桜之図と書いてある。それと、下の真中のやはり四面の図がありまして、ここに永徳真跡と八重桜というのがありまして、ここに妙蓮寺の図面をちょっと思い描いてください。今、松があったのは、この部屋です。つまり天端寺の松の絵というのは、この部屋にあったわけです。桜は一体どこにあったのかというと、この部屋にあってたんです。ですから、四面四面というところになるわけですね。つまり上段の間の境と、この間の境、四面四面、だから丁度びつたり合うわけです。ここに、芳崖は桜を描きまして、しかもそこに八重桜と書いています。これは一体何なのかということですが、それともう一つは、この松と桜ですね。松と桜がこの永徳のと、非常によく似ているんですね。非常に幹の下の方が太くて上の方が細くなつていく。恐らく、智積院の絵を楯とか、桜とか松というふうな部屋ごとに分けたというのは、おそらくこの天端寺になつた、或いは同じ画体でもっと面白く描いてやるよという事で、描いたのかも知れませ

ん。永徳のように、下が異常に大きくて、ぐつぐつしかも曲がりながら細くなつていくという、そういう松でも桜でもないんです。特に桜の場合、永徳の場合は松と桜がほとんど一緒なんです。これ桜と書いてないとかわからない位です。ところが、少なくとも妙蓮寺のもの、それから智積院の久蔵といわれる桜は、そういうふうにはなつていない。時代が文禄ですから、僅かな違いしかありません。そういう風な描き方をしている所に、彼の長谷川派の意欲というものが感じられるのです。

もう一つ八重桜ということ思い出していただきたいことがございます。大田蜀山人という人が書いた随筆『一話一言』の中に、寛政六年の日付で収載している岐阜の関藩士・池田正樹の筆記があります。天端寺の絵を見て書いた文章です。「松に日月」と書いてあります。まさに、松に日月があつたということが、これで証明できるわけです。それとそこに「金貼り付」と書いてあります。だからやっぱり金属を貼り付けたんです。それもこれでわかつてきます。そしてもう一つ、この桜についても書いています。そこに何と書いてあるかというと、これは金貼り付け、これは金地だつたということでしょう。「これをウキザクラ」と書いています。これは浮いて見えるということなんです。つまり、妙蓮寺の障壁画で一番目につくのは何かというと、もちろん松とか桜の木の形とか松の枝の、この枝の動きはこの天端寺の松の枝と全く一緒の動きをしています。もう一つは桜です。下に胡粉を盛り上げて、こんなに厚いんです。これが、まさに浮桜です。或いは八重桜という、その表現ですね。つまり彼らにとつて、天端寺の絵の桜でパッと目に浮かんだのは、或いは頭に残つたのは、八重桜という言葉であるし、浮桜という言葉なんです。つまり、もう普通の絵では考えられない位に盛り上げられた、そういう桜の表現だつたということなんです。

実は、これは智積院の桜も同じように盛り上げているんです。この様に、花びらをグワツと盛り上げると

いのがその後出てくるのは、元禄頃です。元禄頃に琳派系の絵描きの中に出てまいります。この天端寺そして智積院というこれらが、大体天正の終りから文禄の二年ということですから、一五八八年位から一五九三年位までに、まず永徳が試み、そして長谷川久蔵といつか長谷川一門がやつた。そういうことになりまして、この妙蓮寺障壁画のまさに浮桜という表現は、大体ほぼこころへんに持つてこなくていけないわけです。慶長のものだということになると、先程の例えば狩野孝信の絵であつたりして、狩野派でグワツと盛り上げる桜の表現というのは一切ないんです。

幾つかいろんな事を言いましたけども、蓋然性として私はやはり日舜上人の時代、聚楽第が破却されたその材木をもって大方丈を建てた、つまりこれが客殿であつて、その時にこの作品が描かれたに違いないというふうに思います。それは、様々なこの豊かな金雲の表現であると同時に、この松の上からグワツと伸びてくる姿ですね、これは実は智積院とも同じなんですけど、永徳の天正十六年の天端寺の松で実はもう創られて完成しているであります。そして、その天端寺にあつた桜と同じように、桜の一つ一つの花弁が堂々たる盛り上げをして、まさにウキザクラという名前にふさわしいということ、そういうことを考えますと、これは文禄年間の終りから、そして慶長初年ということになります。慶長の終りであるとか元和、或いは寛永に置くというのは、つまり等伯が関与していないということも言っているのに等しいわけでありまして、しかし、これが文禄の終りから慶長の初めということになりますと、等伯が最盛期にこの妙蓮寺障壁画に関わつた可能性が、決して無視できないというふうに言える訳です。今までの研究では、恐らく言われておりませんでしたが、私はこの可能性を捨てるべきではないというふうに考えています。

一応結論的にはそういうことだと思います。ありがとうございます。

(京都国立博物館京都文化資料研究センター長)



これからの展覧会予定



第2展示室

能登空港開港記念3館合同企画展事業 特別展「能登の魅力」 ～豊かな自然との出会い～

平成15年7月5日(土)～8月31日(日)

本年7月7日、新しい空の玄関口「能登空港」がいよいよ開港しますが、その記念特別展として輪島漆芸美術館、能登島ガラス美術館と当館の3美術館による初めての合同展「能登の魅力」を開催する事となりました。

本展では各館が所蔵する特色ある美術品を通して、それぞれの視点による「能登の魅力」を紹介します。当館については「豊かな自然との出会い」をテーマとして、「空」「海」「能登の風土」にちなんだ各作品を展示予定です。



「海の詩 - 旅 - 」 野中 未知子(当館蔵)

第1・2展示室

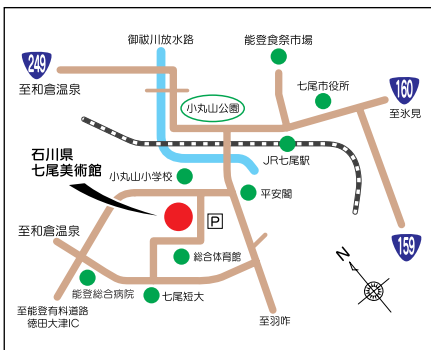
「長谷川等伯展 描かれた動物たち」

平成15年9月6日(土)～10月5日(日)

当館では、桃山時代に京都で活躍した画人・長谷川等伯の郷里にある美術館として、平成8年度より毎年「長谷川等伯シリーズ展」を開催しており、今年で8回目を迎えます。

等伯は仏画・肖像画・花鳥図・山水図と様々な画題に才能を発揮していますが、動物描写においても高い評価を得ています。今回は、出光美術館所蔵の水墨画を中心に、等伯が描いた動物たちに焦点を当て、等伯の人間像にも迫ります。

【写真：「竹虎図屏風」長谷川等伯 6曲1双(内左隻部分) 出光美術館】



交通案内

車.....金沢より能登有料道路
利用約1時間20分

タクシー...JR七尾駅より約5分

徒歩...JR七尾駅より約20分

市内循環バス...JR七尾駅より西回りに
(まりん号) 乗車約6分

休館日のお知らせ

(4月～6月)

4月 7、14～24

5月 無休

6月 2～5、9、16、23、30

次号・第34号(夏号)は7月5日発行予定です。